

風歌のあゝる

風景 ①

齋藤 史

(一)
独りっ子であった。

大人たちの中の、ただ一人の子供は泣いても笑っても見守られ、頃合いにおとなしくしていれば、食事もお八つもかならず向うから現れるものと思っている甘ちゃんであった。

その頃は子供の五人、八人という家も珍らしくはなかった時代、おつきあいは大体同じような軍人家庭なので、生活形態は似たようなもの。子供同士、ひなまつりとか、お誕生日に呼んだり呼ばれたりもしたが、兄弟姉妹の多い家へ行くことは、私にとって、いつもおどろきであった。

まず、内玄関に並ぶ履物の数の多さに圧倒される。廊下に並ぶ大、中、小のスリッパ。

部屋から聞こえてくるがやがや。中に入るといっせいに向けられる年上から年下までの子供達の顔。―わたしの中の、「大人と子供」という日常の分類は、ここで急に混乱する。大人のようなお姉さんから、子供より小さい赤ちゃんまで―。

それを祖父母、母、お手伝いさん（子供十人ともなれば二人）が取り仕切ったり世話をやいたりしながら、並べる食器の数の多いこと、お箸の列の長いこと。そこに配ったり、取り分けたり、注いだりのさわがしさに、茫然となりながらも、一応は「お客」らしくあつかわれ、席も用意されていて、それぞれの名もおぼえ、いつか賑やかな遊びの中に連れこまれてゆくのであった。

(二)
或る日、祖母に連れられて、下町の知り合いへ行った。

おくすり屋さん、と古風に呼んでいた店の表から声をかけ、店の裏側にある部屋に通された。玄関とか廊下とかの手順を経ず、いきなり部屋である事もめずらしく、空気が違う匂いがして、子供ながらにすこし緊張し祖母の側にびつたりと着いて坐っていた。主人は気軽そうに話し始めたが、子供である私には軽くうなずいただけで、気にも留めない様子である。手をついて、きつちりと

「こんにちわ」

と挨拶したが、格別の愛想を言うでもなくつまり、此処の私は、祖母のこぶに過ぎない存在で、ほとんど無視されているようだ。

やがて、どやどやと男の子の団が外から入って来て、これがこの家の子供達と思われたが、年長の一人がひょいと頭を下げて、以下は略。ひとかたまりになり、部屋の隅であそびはじめた。当然こちらの女の子に気付いてはいるのだが、相手にはしないで、勝手にふざけたり、小さく笑ったり、突つきあったり、ひとかたまりになっている。

大人達はおかみさんも混じって大人の話はずんで居り、子供達は子供の世界。お互いに何のさしさわりもなく、一つの部屋の中で

独りっ子

同時進行をしてゆく。そのどちらにも入らない女の子は、こちらの岸から、向うの岸の風景をながめるような具合で、お行儀よく坐り、取り残された感じになった。

自分からは子供の集団に入ってゆけない臆病さ、大人の取り無しを待っている意気地なさも解っていて、つらい独りぼつちに落ちこみかけた頃、主人が、急に「おい」と子供達の方へ呼びかけ、上の子に何かを握らせた。私には突然であったが、彼等は、じつはそれを待っていたらしく、〈心得た〉とばかり、聞き返しもせず、中の二人が表へとび出していった。

待つことしばらく。弾んだ下駄の音を響かせて帰って来たふたり、それぞれ胸に新聞紙



包みを抱えていて、みんなのまん中に置き、それを開いた。

あ、やきいも。ほかほかのやきいも！と、見る間もなく、いつせいに四方から手が出た。素早い一人が

「おれ、お太鼓」まん中の太いひときれをさらった。黒い胡麻がぼつぼつと付いていた。「ずるい」「よこせ」「べえーだ」わっわつともめたが喧嘩にはならない。みんな自分のものを取るのに忙しいからだ。見る見るお芋の数は減ってゆく。

私には、とても来そうもない、とあきらめかけた頃、「待て」と年上の子が言った。彼は残りの中のしつぽの次の次のくらのところを二つ取り上げると、私の前に来てポイと

掌の上へのせた。

あたたかく、いい匂いがした。ゆつくりと皮をむき、口に持っていくと、薄い塩味と甘さが拡がって、おいしくて、嬉しくて、しぜんに、ニコツとなり、彼と彼等の方を見た。全部の眼が、私を見ていた。大人も、子供も。そして私が笑うと、一緒にいつせいに顔をゆるめ、子供達は止めていた自分の口を動かしてはじめた。

「おとなしいんだねえ」とおかみさんが言った。「子供らしくないね」と言われたような気も、すこしした。

—この子供達は一生手をつないでゆくのだろう、と思った。両親がなくなっても、金輪際孤りになることはない。夜は、身を寄せあつて眠ることもできるだろう。

独りっ子のわたくしには、世の中になつたひとりになる怖れが、いつもあつた。生きるすべのない子供のうちに孤りになつたらと思うのは限りなく不安であつた。

〈ひとり来な、ふたり来な、〉とて追羽根のむかし重たき袂がありき

(さいとう・ふみ「原型」主宰)

※このコーナーでは、齋藤史氏のエッセイと前登志夫氏のエッセイを交互に連載いたします。